

「おふでさき」第一号の第十首と第十一首は、

このさきハかくらづとめをつけて
 みんなそろふてつとめまつなり 十
 みなそろてはやくつとめをするならバ
 そばがいさめバ神もいさむる 十一

「かくら」は「カグラ」と読み、漢字をあてるなら「神楽」である。「つとめ」とは辞書的には「一定の時を定めて行う礼拝・儀式(仏教なら読経など)」という意味であるが、第十首では「かくらづとめ」で一つの単語となり、第十首と第十一首の「つとめ」は第一義にはこの「かくらづとめ」を指す。「そば」は「側・傍」で「側近の人々」を意味する。したがって、この二首は「この先は、『かくらづとめ』の手をつけて、皆が揃ってその『つとめ』をするのを待つ。皆が揃ってはやく『つとめ』をするなら、側の人々が勇めば神も勇む」となる。

『注釈』は「かくらづとめ」をこの後の歌で示される様式や意味合いから差し当たって次のようにまとめている。すなわち、「かくらづとめ」とは「かんろだいを中心にして、元初まりの十柱の神様の理をたたえて、十人の人々によって奉仕するおつとめ」であり、それによって「親神様にお勇み頂き、濟世救人のお働きをお願い申すのである」。したがって、「かくらづとめ」の要素には「かんろだい」という「中心点」があること、「元初まり」という「人間の創造」に基づいていること、10人の奉仕人を必要とすることや、さらにそれは「神に勇んでもらう」ためにつとめられ、世と人の「救済」を祈願するための祭儀であることが分かる。

ところで、「かぐら」という神事・儀式は天理教に限らず古くから今日まで日本各地の神社等で行われており、神楽研究の第一人者である本田安次(1906～2001)は、「神楽は恐らく、この国に移住し、今日まで行き続けてきた民族と共にあった古来の祈祷にもとづくものであったろう」と述べ、「後世それが儀礼化し、また、芸能化して、様々の様相をとるに至った」と説明する。「かぐら」の語源に関しては諸説あるようだが、定説では本田が推測するように「神座」(かみくら、かむくら)が転じたものとされる。「くら」という語には、目を宿す「まくら」(枕)、神を奉るための火を宿す「ほくら」(祠)、足を宿す「あぐら」(胡坐)、矢を射るところの「やくら」(矢倉)のように、「暫く留まる、宿す」という意味があつて、「かぐら」とは「神霊の宿るところ」であり、特に採物(とりもの)と呼ばれる榊、幣、杖、弓、剣といった道具が「神の座」として祭儀で重要な役割を果たすことが多い。これらのことから本田は「神座を設けて神を呼ぶ行事—主として鎮魂・招魂の行事—そのものが『かむくらの行事』であり、略して『かむくら』であつたのではないだろうか」と推測している(『日本の伝統芸能 本田安次著作集(第一巻)』)。

さて、このような鎮魂(たましずめ: 抜け出ようとする霊魂を身体のうちに取りめようとする)や招魂(たまふり: 遊離した魂や新たな魂を招きよせようとする)の神事としての神楽は宮中儀礼としてかたちを整え、内侍所の御神楽とよばれるものになった。と同時に、やがて民間にも公開される民俗芸能としての神楽(御神楽と区別して里神楽と呼ばれることもある)も展開してきた。神崎宣武(1944～)は、この儀礼を重んじる神事としての御神楽に対して踊りや舞といった技芸が強

調される芸能として神楽の展開を「神が楽しむもの」から「人が楽しむもの」への推移として捉えて、多くの要素を絡めながら各地で複雑に展開する神楽を以下のように機能分類する。『神話の世界 神楽』(渡辺雄吉著)所収の神崎の分類を少し長いながらも引用する。

- 招魂・鎮魂を主眼とした神楽—榊・鈴・扇などの採物を手に巫や巫女が素面で舞うもので、その場を祓い清め、神霊の降臨鎮座を願うもの。つまり、神迎えの舞である。
 - 湯清めを主眼とした神楽—俗に湯立神楽といわれるもの。明治以降は途絶えたが、それまでは伊勢の御師が盛んにこれをもって祈禱を行い、伊勢神楽ともいわれた。神主や御師の湯立て祈禱は素面で行われるが、鬼や翁の仮面をつけて舞い踊りながら湯清めをする芸能化もみられる。湯花神楽とか霜月神楽ともいわれる。
 - 悪霊・方角祓いを主眼とした神楽—いわゆる獅子舞が中心となる。剣舞や鬼舞をあわせて、厄災解除を祈願する例もある。また、伊勢の太神楽は曲芸や狂言を、東北の山伏神楽は番楽(能楽)を加えて展開した。
 - 託宣を主眼とした神楽—神懸りの神事のことで、太鼓や弓をうちながら神懸って祈禱する方法や布や藁製の蛇をからめて舞いながら神懸って託宣する方法などがある。広義にはイタコの口寄せや釜鳴り神事も同類としてよいだろう。かつては各地でさまざまな行われていたが、戦後は自粛のかたちで衰退した。
 - 神話の演舞を主眼とした神楽—神話劇で、神能ともいう。大国主命やスサノオノミコトが主役の出雲系の神楽、あるいは岩戸開きが中心の日向系の神楽などがある。日本武尊や源頼光を主役としたものなど、地方ごとにその他いくつもの展開がみられる。そして、仮面や衣装も時代ごとに華やかに整えられてきた。
 - 単神の舞踊を主眼とした神楽—右の神話劇ほどに物語化はしていないものであるが、すでに神事色は薄らいでいる。一方にひとり語りがあり、また一方に勇壮に剣舞化したもの、あるいは曲芸化したものがある。
 - 五行思想の教化を主眼とした神楽—盤古大王と五人の王子が登場、問答形式で荒神や土公神の由来を明らかにして、陰陽五行の原理を四季と土用、木・火・土・金・水などに関連づけて説き、五王子の所務分担を確認する。俗に、王子神楽という。もとは全国的に分布がみられたが、現在もつともよく伝えているのは備中荒神神楽である。
 - 稲作の予祝を主眼とした神楽—田楽とか田遊びといわれるもので、稲作の諸作業を唱えごとと身振り以示す。性的な所作をおもしろおかしく織りこむのも各地にほぼ共通する。
- このように見ると神楽の主な目的には招魂・鎮魂、清め、祓い、託宣、神話という比較的普遍的な要素と、五行思想の教化と稲作の予祝といったより特殊化された要素があり、形式的には榊・鈴・扇などの採物、舞、踊り、仮面、演劇、曲芸などがあることが分かる。先に「おふでさき」の「かくらづとめ」には「かんろだい」や「元初まり」といった諸要素があることを述べたが、より厳密に要素分解すれば各地の神楽との比較も可能であろう。ここでは一点、第十一首で「側の人々が勇めば神も勇む」と述べられていることから「かくらづとめ」は「神と人が共に楽しむもの」としての神楽であることを指摘しておきたい。